

古典和歌における反復表現の諸相

福田智子[†] 南里一郎[†] 竹田正幸[‡]

純真女子短期大学 九州大学大学院システム情報科学研究院

要旨 .古典和歌データから同一文字列を2回以上含む歌を抽出し,その分析を行う.『万葉集』と,『古今集』から『新続古今集』までの勅撰集との,あわせて22の歌集に載る約40,000首から,5字以上の同一文字列が2回含まれる歌を48首抽出した.そして,それらの用例の,歌集ごとの分布状況や,表現効果の特質を考察した.その結果,『万葉集』に見られる7字の同一文字列反復が『古今集』には皆無であること,『新古今集』以降の勅撰集には5字以上の同一文字列反復の例はまずなく,唯一例外なのが『玉葉集』であることなどが,具体的に明らかになった.

Some Aspects of Word Repetition in Classical Japanese Poems

FUKUDA Tomoko [†] NANRI Ichiro [†] TAKEDA Masayuki [‡]

[†]Junshin Women's Junior College [‡]Department of Informatics ,Kyushu University

Abstract. In this paper we extract from classical Japanese poems (WAKA) database the poems containing word repetition and attempt to analyze them. From Manyo-Shu and the 21 imperial anthologies, only 48 poems have repetition of a string of length at most five. We observe that (1) repetition of string of length seven which is typical in Manyo-Shu cannot be found in the imperial anthologies, (2) repetition of string of length at most five are hardly seen in the imperial anthologies after Shin-Kokin-Shu and the only exception is Gyokuyo-Shu.

1. はじめに

二十一世紀に入り,国語学・国文学の分野でも,情報技術の導入が,いよいよ避けて通れないものとして取り沙汰されるようになってきた.たとえば,国語学・国文学プロパーの運営する学会,全国大学国語国文学会でも,「情報技術は文学研究をいかに変えるか」というテーマが,夏期大会のシンポジウムで採り上げられた*1.また,日本経済新聞(平成13年9月8日)の文化欄においても,「デジタル国文学」と題する特集が生まれ,コンピュータを用いた文学研究のあり方が問われ

*1 この内容については,全国大学国語国文学会編『文学・語学』第171号(平成13年11月)に収録されている.

ている。

このような状況の下、筆者らはこれまで、国語学・国文学・情報科学という、それぞれの専門知識を持ち寄り、古典和歌における表現の分析を行ってきた。すなわち、5-7-5-7-7という音数律をもつ和歌を、単なる仮名の文字列として捉え、計算機科学に基づいたプログラムによって、用例の自動抽出を試みたのである。その結果、国語学・国文学研究の立場からいえば、従来、ひとりの研究者では覆いきれなかった広い視野を獲得することができ、本歌取りの指摘^{*2}や、歌集の成立年代推定^{*3}など、思わぬ発見をするに至った。本稿では、それら一連の研究の一環として、古典和歌における反復表現を自動抽出し、上代から中世にかけての史的変遷をたどる。

2. 古典和歌における反復表現

めと
内大臣藤原卿、采女安見兒を娶る時に作る歌一首
ワレハモヤ ヤスミコエタリ ミナヒトノ エカテニストイフ ヤスミコエタリ
吾者毛也 安見兒得有 皆人乃 得難尔為云 安見兒衣多利

『万葉集』巻第二、相聞、95番

これは、藤原鎌足が、天智天皇の采女 ^{うねめ やすみこ}安見兒を得た時の歌である。帝付きの女性に近づくことは禁忌とされていた当時、格別の叡慮により安見兒を賜った鎌足の、手放しの喜びが、第二句と結句の「やすみこえたり」の繰り返しに表れている。

また、初の勅撰和歌集『古今集』の冒頭歌、

ふるとしに春たちける日よめる
としのうちに 春はきにけりひととせを こそとやいはむ ことしとやいはむ
在原元方

『古今集』巻第一、春歌上、1番

は、理屈に偏した歌として正岡子規が批判したことで知られている。第四句と結句の「...とやいはむ」という表現が繰り返され、「こそ(去年)」と「ことし(今年)」という対が際立っている。

*2 名歌の横顔 古典和歌再読(福田智子、南里一郎、竹田正幸) 文部省科学研究費補助金特定領域研究「古典学の再構築」ニューズレター第8号、pp. 84-87、平成12年11月

*3 福田智子、南里一郎、竹田正幸「古典和歌における類似歌発見断章」(文部省科学研究費補助金特定領域研究「古典学の再構築」ニューズレター第7号、pp. 50-53、平成12年7月)

福田智子、竹田正幸、南里一郎「類似歌抽出に基づく歌集の成立年代推定」(情報処理学会研究報告) Vol. 2000 No. 100, pp. 49-56、平成12年10月)

これら二首は、ある特定の表現が2回繰り返して用いられているという共通点をもつ。がしかし、一読して明らかなように、その反復表現が我々にもたらす印象は、全く異質なものである。どうやら、一首の歌の中で同一語句を反復する場合、その反復された語句(文字列)の長さや位置が、様々な表現効果を生みだしているようである。そこで本稿では、『万葉集』と、『古今集』から『新続古今集』までの勅撰集、あわせて22の歌集に含まれる約40,000首を対象として、句頭か句末に5字以上の同一文字列を2回以上含む歌を自動抽出し、その歌集ごとの分布状況や、表現効果の史的变化について、考察してみたい。

3. 反復表現の網羅的な抽出

反復表現をもつ歌を収集しようとするときに、今日、用例検索のために一般に用いられている『新編国歌大観』CD-ROMは、役に立たない。キーワードのAND検索は一応可能なことになっているが、一首中に同一文字列が複数回出現する用例だけを検索して拾いあげることができないのである。たとえば、『*とやいはむ]かつ[*とやいはむ]で検索しても、

弘長元年、後嵯峨院に百首歌たてまつりける時、春雪
前大納言為家
まづさける花とやいはん うちわたす 遠かた野への 春のあは雪
『新後撰集』巻第一、春歌上、17番

といった、『...とやいはむ]が1箇所しか出てこない用例までも、検索結果として提示される。つまり、『*とやいはむ]ひとつで検索したときと同じ結果しか得られないのである。

が、そもそも、いわゆるキーワード検索で反復表現を網羅するのは、きわめて困難であろう。どのような文字列が繰り返されているか、研究者の勘や経験によってキーワードを決定し、それによって用例をひとつ残らず拾い出すのは、まず不可能である。では、『万葉集』と21の勅撰集(二十一代集)とを合わせた40,000首近くの和歌に直接目を通すのか。用例収集のみを目的としているだけに、これはたいへんつらい作業となることだろう。また、人間の目では、用例の見落としの不安が常につきまとう。だが、計算機は、5-7-5-7-7の中に、5字以上の同一文字列が存する歌を抽出するという単純作業を、きわめて短時間で、しかも正確に行ってくれる。我々人間は、その結果の吟味に力を注げばよいのである。

4. 反復表現抽出の結果

本稿で用例抽出の対象とした全歌数は、『万葉集』と二十一代集、合わせて38,387首である。このうち、5字以上の同一文字列をもつ歌は、48首(全体の約0.125%)であった。歌集別の用例数は、次のとおりである。

奈良時代	『万葉集』	天平宝字 2年(759)	23首 [全4,540首中]
平安時代	『古今集』	延喜 5年(905)	4首 [全1,111首中]
	『後撰集』	天曆 5年(951)	2首 [全1,425首中]
	『拾遺集』	寛弘 2年(1005)	5首 [全1,360首中]
	『後拾遺集』	応徳 3年(1086)	2首 [全1,229首中]
	『金葉集』	大治 2年(1127)	1首 [全717首中]
	『詞花集』	仁平元年(1151)	2首 [全420首中]
	『千載集』	文治 3年(1187)	1首 [全1,290首中]
	鎌倉時代	『新古今集』	元久 2年(1205)
『新勅撰集』		文暦 2年(1235)	なし [全1,382首中]
『続後撰集』		建長 3年(1251)	なし [全1,381首中]
『続古今集』		文永 2年(1265)	なし [全1,926首中]
『続拾遺集』		弘安元年(1278)	なし [全1,464首中]
『新後撰集』		嘉元元年(1303)	なし [全1,617首中]
『玉葉集』		正和元年(1312)	6首 [全2,818首中]
『続千載集』		元応 2年(1320)	なし [全2,152首中]
南北朝時代	『続後拾遺集』	嘉暦元年(1326)	なし [全1,355首中]
	『風雅集』	貞和 5年(1349)	1首 [全2,211首中]
	『新千載集』	延文 4年(1359)	1首 [全2,366首中]
	『新拾遺集』	貞治 3年(1364)	なし [全1,920首中]
室町時代	『新後拾遺集』	永徳 4年(1384)	なし [全1,554首中]
	『新続古今集』	永享 11年(1439)	なし [全2144首中]

全48首中、約半数の23首が『万葉集』に集中している。その後、『拾遺集』をピークにして、『千載集』までかろうじて数首認められる。だが、『新古今集』では用例は皆無となり、その状態は『新後撰集』まで続く。次の『玉葉集』において、一時的に6首も出現する。

5. 5字以上反復表現の史的変遷

(1) 『万葉集』では、全23例のうち、7字反復が16例を占める。しかも、すべて第二句と結句とに位置する。

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首
アシヒキノ ヤマノシツクニ イモマツト フレタチヌレヌ ヤマノシツクニ
足日本乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二

『万葉集』巻第二、相聞、107番

オホノヤマ キリタチワタル フガナゲク オキノノカゼニ キリタチワタル
大野山 紀利多知和多流 和何那宜久 於伎蘇乃可是尔 紀利多知和多流

『万葉集』巻第五、雑歌、803番

(2) 『古今集』では、『万葉集』に多かった7字反復の用例が姿を消す。その一方で、5字以上の反復が2パターン組み合わせられた例が見える。

(題しらず) (よみ人しらず)
われをおもふ 人をおもはぬ むくいにや わが思ふ人の われをおもはぬ

『古今集』巻第十九、誹諧歌、1041番

これは、5字と3字の文字列反復を組み合わせた、次の『万葉集』歌の技巧の延長線上に位置づけることができよう。

コムトイフモ コヌトキアルヲ コジトイフヲ コムトハマタジ コジトイフモノヲ
将来云毛 不来時^有乎 不来云乎 将来常者不待 不来云物乎

『万葉集』巻第四、相聞、530番

(3) 『後撰集』の2例は、いずれも『古今集』の反復表現を継承した作りになっている。

思ふ人侍りける女に物のたづびけれど、つれなかりければつかはしける
思ふ人 おもはぬ人の 思ふ人 おもはざらなん 思ひしるべく

『後撰集』巻第九、恋一、571番

この歌が、前掲の『古今集』1041番歌を踏まえていることは、一目瞭然である。また、次の歌の「…とやいはむ」の繰り返しは、『古今集』1番、943番に見える表現である。

月のおもしろかりけるをみて みつね
ひるなれや 見ぞまがへつる 月影を けふとやいはむ きのふとやいはむ

『後撰集』巻第十五、雑一、1100番

(4) 『拾遺集』は、これまで目立たなかった、連続句における反復表現が目立つ。

藤原誠信元服し侍りける夜、よみける 源したがふ
老いぬれば おなし事こそ せられけれ きみはちよませ きみはちよませ
『拾遺集』巻第五、賀、271番

(題しらず) (人まる)
こひてしね こひてしねとや わぎもこが わが家の門を すぎてゆくらん
『拾遺集』巻第十五、恋五、936番

なお、この『拾遺集』936番は、『万葉集』の人麿歌の異伝である。『万葉集』の本文は、初句と第二句が「恋死 恋死耶」になっており、今日では「こひしなば ことほし^よしねとや」と訓むのが一般的だが、『拾遺集』は、「こひてしね ことほし^よしねとや」の訓みを採用したことになる。もちろん、このような反復表現は『万葉集』的ではなく、『拾遺集』成立当時の好尚の反映と見られる。

(5) 連続句における反復は、『後拾遺集』にも見られる。ただし、初句と第二句、第四句と結句が、それぞれ対をなしている歌は、これまでなかったものである。

橘則長、こしにてかくれはべりにけるころ、さがみがもとにつかはしける
橘季通
おもひいづや おもひいづるに かなしきは わかれながらの わかれなりけり
『後拾遺集』第十、哀傷、560番

清少納言、人にはしらせでたえぬなかにてはべりにけるに、ひさしおとづれはべらざりければ、よそよそにてものなどいひ侍けり、をんなさしよりにてわすれにけり、などいひ侍ければよめる (藤原実方朝臣)
わすれずよ またわすれずよ かはらやの したたけぶり したむせびつ
『後拾遺集』第十二、恋二、707番

(6) 『金葉集』『詞花集』『千載集』の用例は少なく、すべて『古今集』から『後拾遺集』にかけての反復表現の模倣である。

法輪へまうでけるに、さかのの花おもしろくさきて侍りければみてよめる
赤染衛門

あきの野の はなみるほどの ころをば ゆくとやいはむ とまるとやいはむ

詞花集』巻第三 , 秋 , 113番

(7) 『新古今集』から『新後撰集』まで、5字以上の反復表現は姿を消す。折しも、定家・為家ら、御子左家の人々が、勅撰集の撰者として歌壇の重鎮であった頃のことである。為家以降、二条家・京極家・冷泉家と三派に分かれてからも、嫡流の二条派の人物が撰者になった勅撰集には、5字以上の反復表現は、まず見られない。唯一の例外が、次の『新千載集』歌である。

(平重時朝臣、子うませて侍りける七夜によみてつかはしける)

返し

平重時朝臣

千年とも かぎらぬものを 鶴の子の なほ鶴の子の 数をしらねば

『新千載集』巻第二十、慶賀歌、2286番

この歌は、子どもの誕生を祝う歌に対する返歌であり、生まれたばかりの子を指している「鶴の子の」という表現が反復されている。慶賀の歌の反復表現は、すでに『拾遺集』271番にも指摘するところであり、ここに、5字以上の反復表現が用いられる詠歌の場の、ひとつの典型を見ることができよう。

(8) 反復表現は、『万葉集』(京極為兼撰)において、一時的に復活する。『新古今集』以降、全く見られなかった反復表現をもつ歌が、京極派の中心人物であった為兼によって、6首も採られたのである。それらの用例の中には、『万葉集』再評価の一端が窺えるものもある。

(題しらず)

大津皇子

あしびきの 山のしづくに いもまつと われたちぬれぬ やまのしづくに

『万葉集』巻第十、恋歌二、1377番

この万葉歌は、『万葉集』において初めて勅撰集に採られることになった。また、次の歌の作者、女御徽子女王は、『後撰集』時代の歌人であり、『新古今集』『後撰集』に見られた、2パターン反復の恋歌が、ここにきて、にわかに勅撰集に採られたことになる。

天暦のみかどわすれぬるかとのたまはせたりければ

女御徽子女王

わすられず おもはましかば わすれぬを わする物と おもはましやは

『万葉集』巻第十一、恋歌三、1607番

京極派は、伝統的な二条派に対抗して、新たな歌風を確立したといわれる。勅撰集における5字以上の反復表現に着目してみても、『玉葉集』には、二条派の撰者が編纂した集とは異なる撰歌傾向が存するといえよう。ただし、『玉葉集』が二条派の伝統を打破しようとした結果、その伝統をさらに遡って、御子左家が歌壇の中樞を占めるはるか以前の、奈良時代から平安時代中期頃の和歌に回帰した一面をもつ点、きわめて興味深い。

6. おわりに

以上、5字以上の反復をもつ歌が、古代から中世にかけてよみ継がれてきた様相を、勅撰集を中心に通覧してきた。その結果、『玉葉集』に多数存する7字反復が、『古今集』では見えなくなる。こと、『新古今集』以降の勅撰集には5字以上の反復表現はまずなく、唯一例外なのが『玉葉集』であること、などが明らかになった。ここにきて我々は、やっと文学研究の出発点に立ったことになる。本稿をなすにあたって具体的に把握した用例は、各勅撰集の撰歌態度を分析する際の、有効な視点になりうるだろう。また、同時代の私撰集や私家集と比較したり、歌学書を参看したりすることにより、その時代や流派の歌風の特色を見極めることにもつながるはずである。

今後は、反復文字列の数を4字、3字、2字に変えて、用例抽出を試みる必要がある。これで、たとえば同音反復の序詞が網羅的に抽出できるであろう。また、句頭、もしくは句末の1字に着目すれば、いわゆる頭韻、脚韻の問題にもアプローチできる。これらの点については鋭意検証中であり、反復文字列をもつ歌を総合的に把握、分析することを目指している^{*4}。

情報技術は、国文学研究者に、より広い視野をもつことを強いる。上代から中世まで、時代を通して用例を収集するという膨大な作業を、計算機はわずかな時間で正確に遂行するからである。筆者らはこれまで、様々な指標を設定して、古典和歌データから用例を抽出してきたが、それらの作業はすべて、市販のノートPCによっておこなっている。400MHzのCPU、メモリ128MBのPCだが、本稿をなすにあたって用例の抽出に要した時間は、13分2秒であった。ちなみに、1.3GHzのCPU、メモリ512MBのPCで同じ作業を試みたところ、3分7秒で終了してしまった。

国語学・国文学研究者が、ふと浮かんだ思いつきを、ノートPCに積み込まれた最新の情報技術によって、いつでも簡単に検証できる。そんな時代の到来によって、これまで、用例収集に多大なる労力を要するため、断念せざるをえなかった研究も、今後は幅広く着手されることになるであろう。

*4 K. Yamamoto, M. Takeda, A. Shinohara, T. Fukuda and I. Nanri: Discovering Repetitive Expressions and Affinities from Anthologies of Classical Japanese Poems, In Proc. 4th International Conference on Discovery Science, pp. 413-425, Lecture Notes in Artificial Intelligence Vol. 2226, Springer-Verlag, 2001.